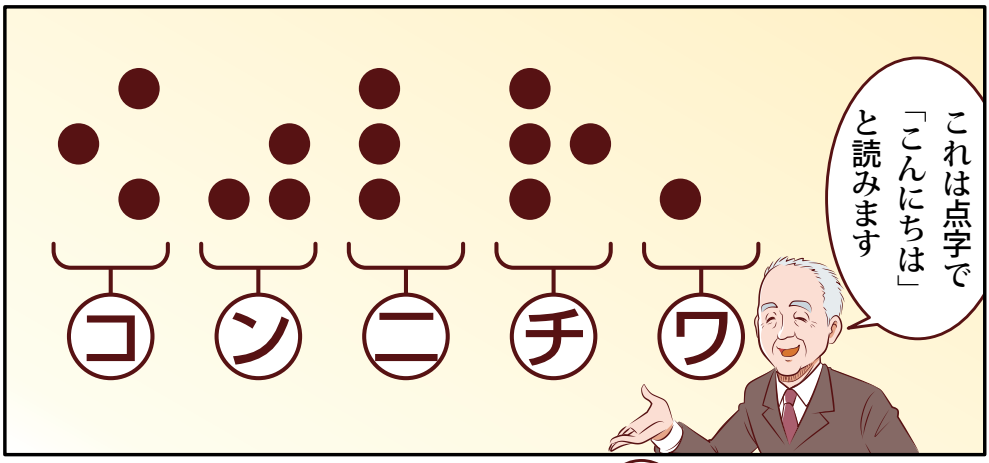
読める、しあわせ

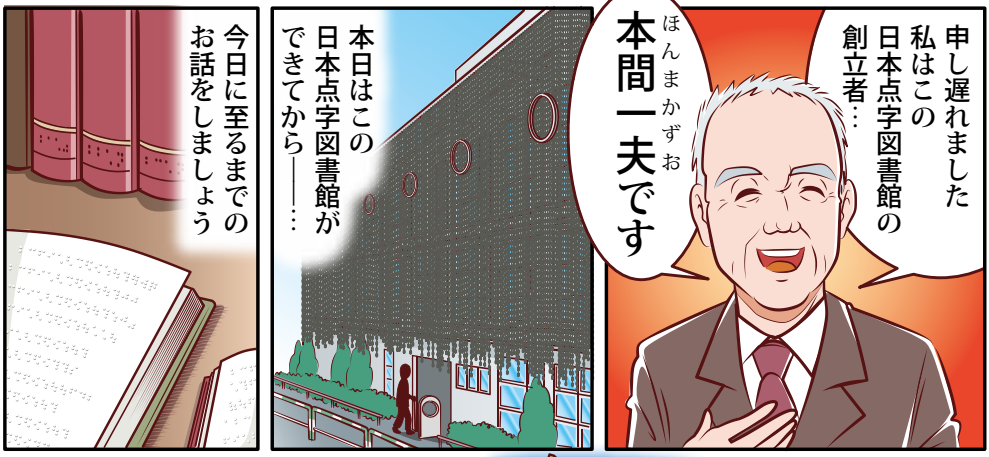
日本点字図書館

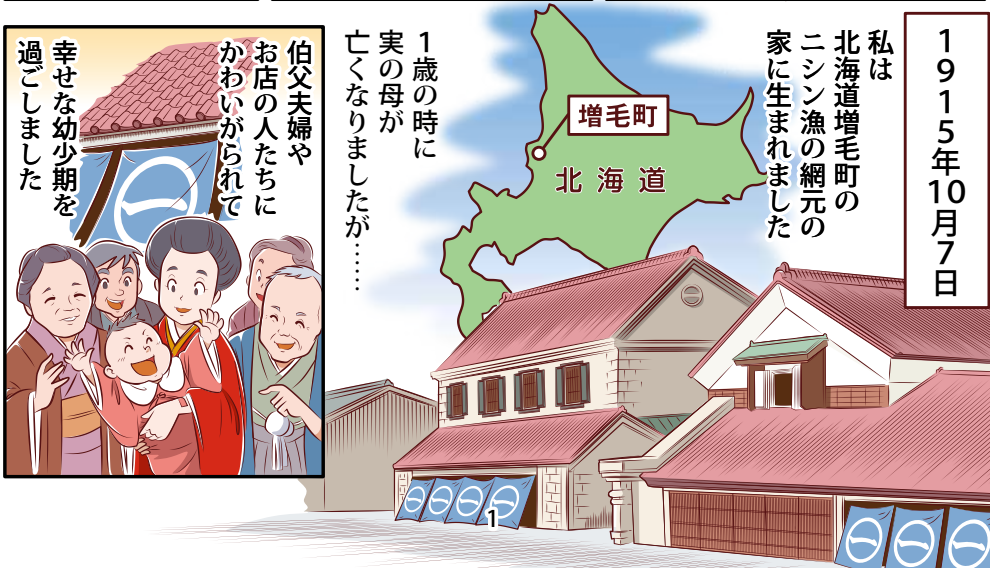
見えない人の
「読めるしあわせ」を
叶えるために

日本点字図書館創立者

本間一夫の生涯


これは点字で
「こんにちは」
と読みます
ワ
チ
ニ
ン
コ


申し遅れました
私はこの
日本点字図書館の
創立者…
本間一夫（ほんまかずお）です
本日はこの
日本点字図書館が
できてから――…
今日に至るまでの
お話をしましょう


1915年10月7日
私は
北海道増毛町の
ニシン漁の網元の
家に生まれました
増毛町
北海道
1歳の時に
実の母が
亡くなりましたが……
伯父夫婦や
お店の人たちに
かわいがられて
幸せな幼少期を
過ごしました

思いもかけない不幸が
訪れたのは
5歳になってまもなくの
冬の日――…

雪の中で
遊んでいると
突然
激しい頭痛に
おそわれました

私は脳膜炎という
おそろしい病気に
かかって
しまったのです…

何日も高熱に
うなされ
生死の境を
さまよいました

やがて
家族や周囲の
人びとの懸命な
看病で

よかった…
よかった…

ミカン
たべたい…

奇跡的に一命は
とりとめましたが
この時の
病気がもとで…

あれ？
いや

私は
視力を失って
しまいました

目の見えなくなった私に
まわりの皆が本を
たくさん読んでくれました

私は本が
大好きに
なりました

空飛ぶじゅうたん

しかし
同じ年頃の子どもたちのように
には学校に通えず……

大好きな本も
自分の力では読めません
そんなもどかしい日々でした……

13歳になって
私は函館盲唖院に
入学しました

本間くん
これを
さわって
ごらん

佐藤在寛院長

なんだろう？
厚い紙の表面が
ぶつぶつと
出っ張っている……

それは
「点字毎日」
という新聞だよ

この学校で点字を
覚えれば
君は自分で本を
読めるようになるよ

えっ！
これが
文字ですか!?

これが私と点字との
出会いでした

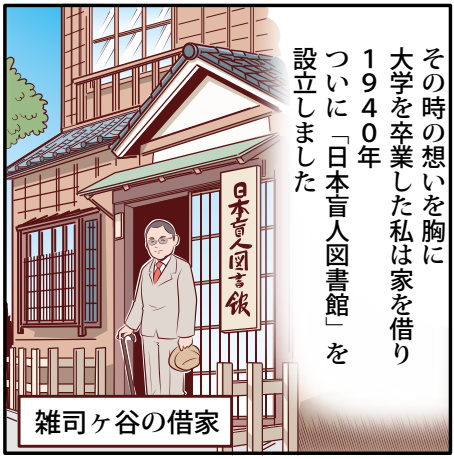
それからというもの
私は点字の本を
読みあさりました

しかし
まだ点字の本は種類も数も
とても少なかったのです

ある日
私はロンドンに
世界一の点字図書館が
あるのを知りました

日本にも
点字図書館を
つくりたい!!

その時の想いを胸に
大学を卒業した私は家を借り
1940年
ついに「日本盲人図書館」を
設立しました



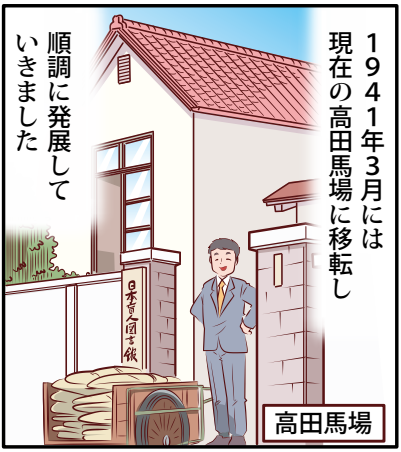
700冊の点字本
からのささやかな
スタートでした

ここから
日本全国の
希望者に無料で
貸し出しました

「日本盲人図書館」を
開館するにあたり
多くの方々からご支援を
いただきました

その中でも
社会教育家の後藤静香（ごとうせいこう）氏による
「点訳奉仕運動」は図書館の
本の数を増やすことに
とても貢献してくれました

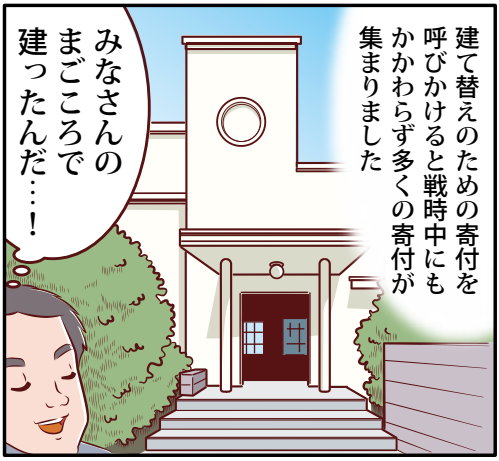
1941年3月には
現在の高田馬場に移転し



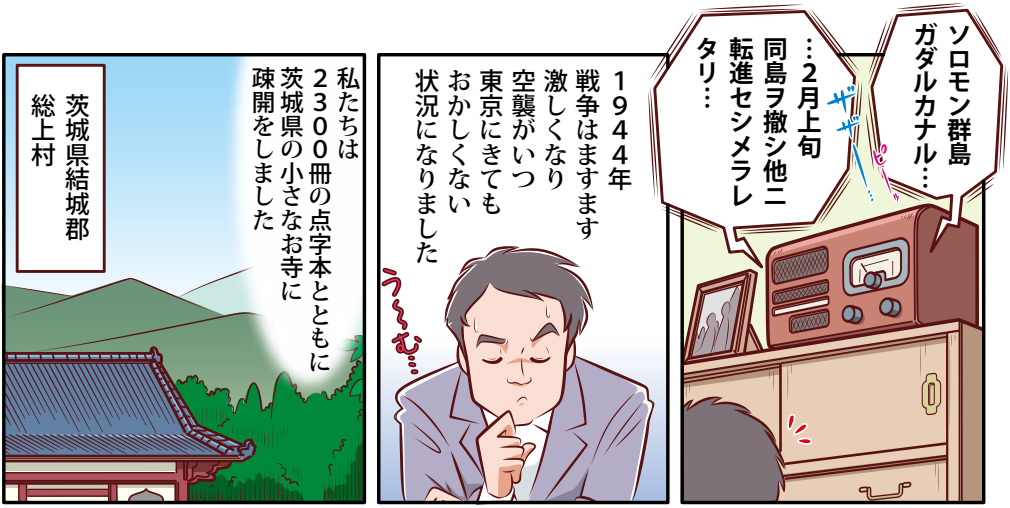
順調に発展して
いきました

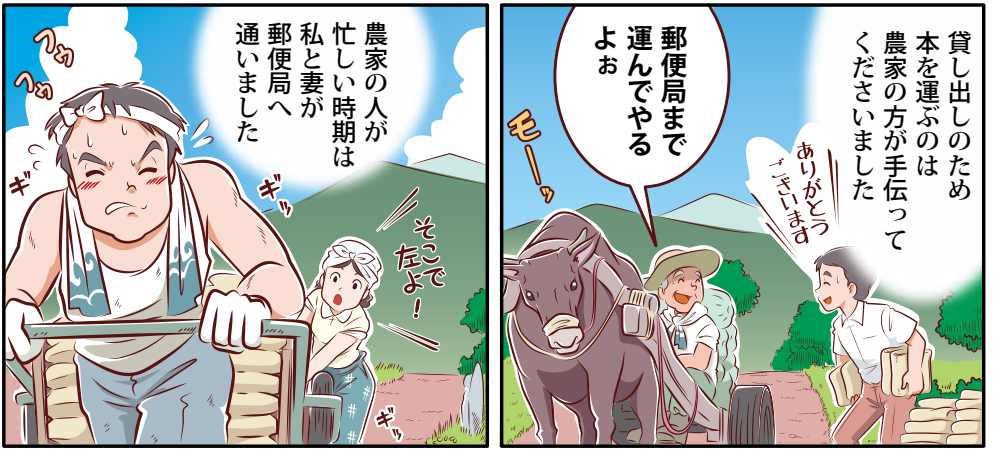
すぐに本は
置く場所が
なくなるくらいに
増えていきました

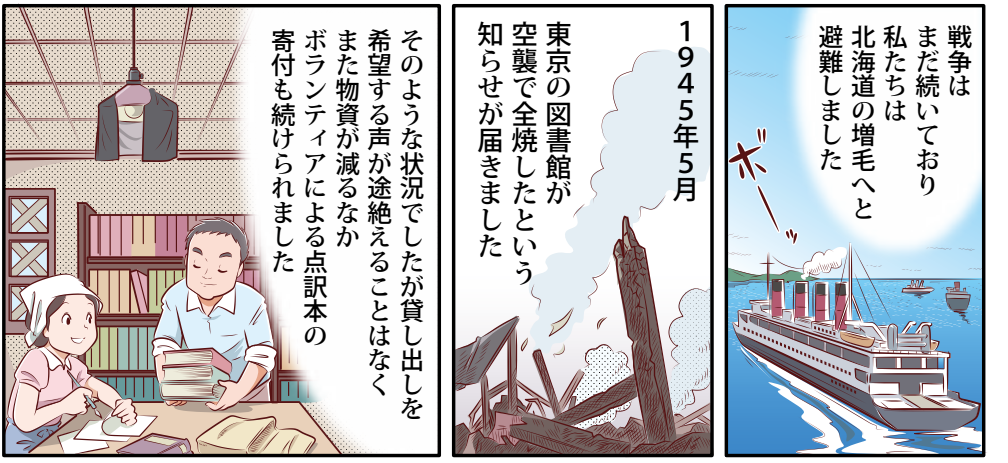
建て替えのための寄付を
呼びかけると戦時中にも
かかわらず多くの寄付が
集まりました



しかし、戦争は日に日に
激しさを増していきました


ソロモン群島
ガダルカナル…
…2月上旬
同島ヲ撤シ他ニ
転進セシメラレ
タリ…
1944年
戦争はますます
激しくなり
空襲がいつ
東京にきても
おかしくない
状況になりました
うぅ～む…
私たちは
2300冊の点字本とともに
茨城県の小さなお寺に
疎開をしました
茨城県結城郡
総上村


貸し出しのため
本を運ぶのは
農家の方が手伝って
くださいました
郵便局まで
運んでやる
よぉ
モーッ
ありがとう
ございます
農家の人が
忙しい時期は
私と妻が
郵便局へ
通いました
そこで
左よ！
ギッ
ギッ
ギッ


戦争は
まだ続いており
私たちは
北海道の増毛へと
避難しました
ボーッ
1945年5月
東京の図書館が
空襲で全焼したという
知らせが届きました
そのような状況でしたが貸し出しを
希望する声が途絶えることはなく
また物資が減るなか
ボランティアによる点訳本の
寄付も続けられました

戦争が終わると
私たちは東京に戻って
焼けた図書館を
再建しました

「日本点字図書館」に改称

しかし
戦後のインフレにより
資金繰りは
きびしく…

日々寄付金集めに
走り回り…

増える本の置き場が
なくなったり…

どんなに
がんばっても
経営は苦しくなる
一方でした……

一体
どうすれば……

1953年1月

そんな時に転機が
訪れました
私が「朝日社会奉仕賞」を
受賞したのです

これによって
点字図書館の仕事が
はじめて
社会に広く認められ
寄付が集まるように
なったのです

さらに
1954年には
国の予算がついて
建物は大きくなり
設備も整いました

1955年には
従来の貸し出しに加え
点字図書の
出版も始めました

1958年にはテープに朗読を
吹き込んだ「声のライブラリー」
も発足しました

御釈迦様は…

ある日の事でございます
御釈迦様は…

点字の読めない人でも
読書を楽しめるようになりました

1964年
ニューヨークで
「世界盲人福祉会議」が
開かれました

お金は後援会に
任せて外国の
進んだ福祉政策を
見てくるべきです

式場隆三郎（後援会長）

ニューヨーク会議
出席

ロンドンナショナル
ライブラリーの
大点字図書館視察

外国の動物園や遺跡
などでは盲人は無料

点字の考案者
ルイ・ブライユの
生家訪問

9カ国、17都市の
盲人施設・点字図書館
などを視察

日本にはなかった
盲人用の生活用具
など150点を購入

会議の後には
ヨーロッパへ渡り
50日にもおよぶ
大旅行になりました

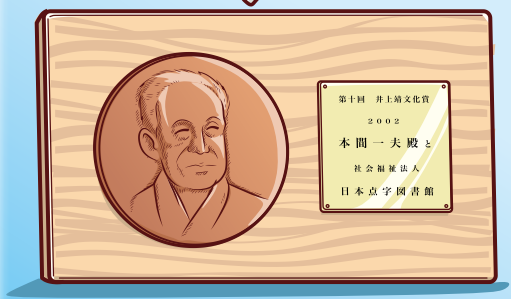
この旅で持ち帰った
盲人用具が反響を
集めたので1966年
点字図書館に用具部を
開設しました

そこでは
さまざまな用具の
販売および
開発・製作を
するようになります

1996年～1998年に
現在の建物になりました

完成式典には皇后陛下から
大変温かなお言葉を
賜りました

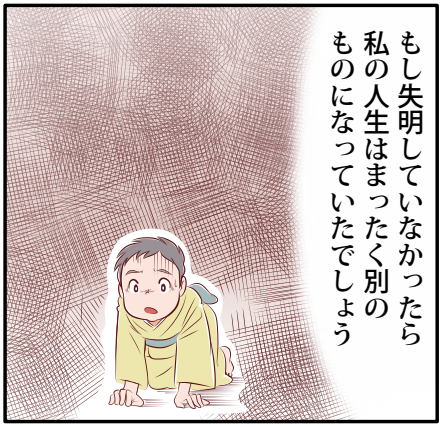
また2003年に
「第10回井上靖文化賞」を
私と日本点字図書館が
連名で受賞しました



「日本点字図書館」は
その後も順調に発展を
続けております

今では職員も大幅に増え
掘りごたつに4人で
向き合って仕事を
していた頃を
思い出すと感無量です

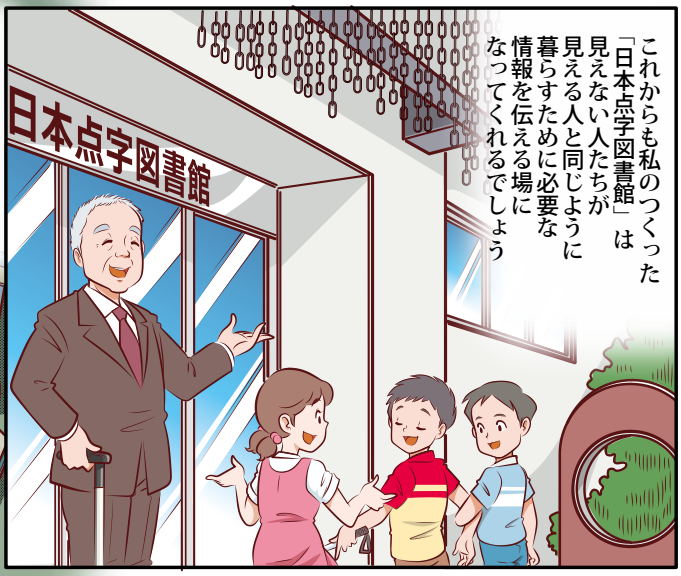
もし失明していなかったら
私の人生はまったく別の
ものになっていたでしょう



失明によって
平凡な人生への道は
断たれました……

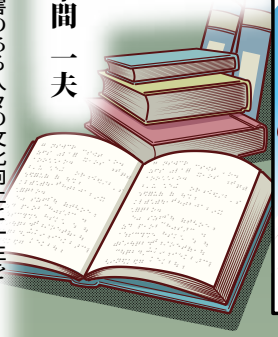
しかし
この点字図書館という意義ある
仕事を得て、私は多くの
愛と善意の人々にめぐりあい
助けられ、励まされました

これからも私のつくった
「日本点字図書館」は
見えない人たちが
見える人と同じように
暮らすために必要な
情報を伝える場に
なってくれるでしょう



権利において、
義務において、
晴眼二つの世界が
あくまでも公平で
なければならぬ

本間一夫



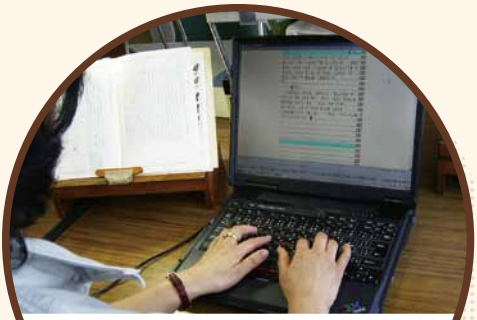
※視覚に障害のある人々の文化向上に一生を
捧げた本間一夫は、多くの人に惜しまれながら、
2003年8月1日に87年の生涯を閉じました

制作：ad-manga.com

これが現在（いま）の日本点字図書館です。

図書の貸出・配信

見ること・読むことがむずかしい人なら、全国どこにお住まいでも無料で利用できます。毎日トラックで、点字・録音図書を郵便局へ運ぶ郵送貸出のほか、24時間いつでも読書ができるインターネットの電子点字・録音図書館（サピエ図書館）を管理しています。



点字の本を作る

現在、点字の本は、ボランティアの方々によって1冊1冊パソコンを使った点訳作業で作られます。入力していただいた点字図書は、視覚障害者の指による触読校正を経て蔵書になります。データ化された点字は、幅広く活用されています。

声の本を作る

館内には、朗読ボランティアの方々が本を読むための録音スタジオが18部屋あります。また、インターネットを介して自宅で録音・編集できるシステムを使う方法もあります。近年は、コンピュータの読み上げ機能を使うデジタル図書の製作・提供も始めています。

ミニコラム

本間一夫の生涯について、さらに詳しく調べたい方は、本間一夫著『指と耳で読む』岩波新書、池田澄子著『愛の点字図書館長』偕成社などがあります。日本点字図書館のショップでは、これらの本に加え、点字についての本もたくさん取り扱っています。

見えにくくなった人のための教室、相談会

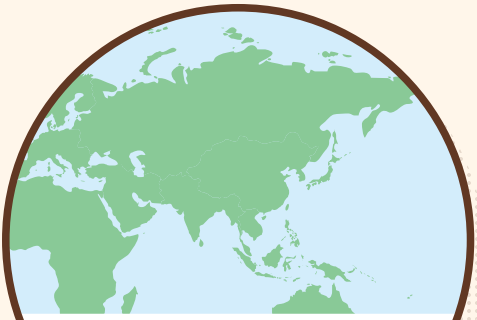
人生の途中で見えにくくなってしまった人は、とてもつらい気持ちを抱えています。そうした方々のための相談会を開いたり、生活の役に立つよう点字やパソコンの講習会、支援機器の体験会などを開催しています。

便利グッズの販売

点字器や白い杖だけでなく、音声で使える調理器具や触覚で分かるゲームなど、見えない・見えにくい人たちの暮らしを助けてくれる便利グッズ約1,000点を取り扱っており、店頭はいつも賑わっています。また、来館できない人のためにインターネットでお買い物ができるショッピングサイトもあります。

ご支援のお願い

漫画にもありましたが、当館の事業は多くの方々のご寄付やご奉仕によって成り立っています。いらなくなったCDや書き損じハガキなどを送っていただいたり、チャリティイベントへの参加といった方法もあります。視覚障害者の「読める、しあわせ」を叶えるために、どうぞご支援・ご協力をお願いします。



アジアの視覚障害青年支援

目が不自由で困っている人たちは世界中にいますが、特に困っている人が多いアジアの若き視覚障害者のためにパソコンの講習会を開催したり、点字資料製作に必要な機器の提供と講習を毎年おこなっています。

ミニコラム

日本点字図書館の建物は、正面にステンレスの鎖が垂れ下がっています。これは「滝」をイメージしたもので、視覚障害の方々に、流れる滝のように情報を届けたいという願いを込めています。設計は、建築家の鈴木エドワードさん。鎖は、400本以上あり、重さは27トンになります。

本間一夫と日本点字図書館の年表

●1915(大正 4)年 10 月 7 日
北海道増毛町にて誕生

●1920(大正 9)年 12 月 12 日
雪遊びの途中頭痛が襲う
脳膜炎と分かり、小樽の鎌倉病院へ入院。次第に光が失われる

●1929(昭和 4)年 5 月 15 日
函館盲唖院に入学
佐藤在寛院長から、点字毎日を手渡され、点字と初めて出会う

●1933(昭和 8)年 3 月
函館に来た岩橋武夫の講演「光は闇より」を聞き、
強い感銘を受ける

●1934(昭和 9)年
盲学校弁論大会の東北・北海道大会で優勝
演題は「聞け、黎明に高鳴る響きを」

●1936(昭和 11)年 4 月
関西学院大学専門部英文科に入学

●1937(昭和 12)年 5 月 16 日
学院のベーツ院長により洗礼を受ける

●1939(昭和 14)年 5 月
上京し、陽光会に入り、月刊誌『点字クラブ』の編集責任者を
任せられる

●1940(昭和 15)年 11 月 10 日
東京市豊島区雑司が谷町に日本盲人図書館を開設

●1941(昭和 16)年 3 月 7 日
淀橋区諏訪町(現・新宿区高田馬場)に移転

●1942(昭和 17)年 5 月 11 日
東京府から社会事業としての認可を受ける

●1943(昭和 18)年 6 月 21 日
喜代子夫人と結婚

●1943(昭和 18)年 7 月 18 日
寄付金を集めて、点字図書館としての建物が落成する

●1944(昭和 19)年 3 月
戦局の悪化により、茨城県結城郡 三月寺に 2,300 冊の
点字書と共に疎開

●1945(昭和 20)年 4 月
北海道増毛町の実家に 3,000 冊の点字書と共に疎開

●1945(昭和 20)年 5 月 25 日
戦災により東京の図書館棟全焼

●1948(昭和 23)年 1 月
疎開先より上京、仮事務所で事業再開

●1948(昭和 23)年 4 月
日本点字図書館と改称
戦後のインフレに対処するため、会費制度を導入

●1952(昭和 27)年 5 月
社会福祉法人日本点字図書館設立認可

●1953(昭和 28)年 1 月 3 日
本間一夫が朝日社会奉仕賞受賞

●1955(昭和 30)年 1 月
厚生省委託点字図書製作・貸し出し事業開始
国費による新館建築
無料貸出制度に戻す

●1958(昭和 33)年 9 月 23 日
「声のライブラリー」発足

●1959(昭和 34)年 7 月
初のテープ雑誌『テープマガジン文藝春秋』を発刊

●1964(昭和 39)年 7 月 25 日～9 月 12 日
世界盲人福祉会議出席に合わせ、
アメリカ・ヨーロッパの盲人施設を視察
約 150 点の盲人用具を購入して帰国

●1965(昭和 40)年 2 月 20 日、21 日
海外の盲人用具展示会を開催
500 名が集まる

●1966(昭和 41)年 4 月
視覚障害者用具販売事業開始

●1975(昭和 50)年 4 月
東京都委託希望朗読サービス開始

●1976(昭和 51)年 11 月
声の図書のカセットテープ化開始

●1977(昭和 52)年 4 月
本間一夫が第 11 回吉川英治文化賞受賞

●1991(平成 3)年 5 月
パソコン点訳者養成事業開始

●1994(平成 6)年 12 月
アジア盲人図書館協力事業開始

●1998(平成 10)年 11 月 12 日
国費による新本館・別館完成
皇后陛下ご臨席のもと新館披露の式典開催

●1999(平成 11)年 8 月
デイジー図書(デジタル録音図書)の貸し出し開始

●2003(平成 15)年 1 月
本間一夫と日本点字図書館が第 10 回井上靖文化賞受賞

●2003(平成 15)年 8 月 1 日
本間一夫永眠(享年 87 歳)
従五位に叙せられる

この冊子は、公益財団法人原田積善会の助成を受けて製作いたしました。

読める、しあわせ
社会福祉法人
日本点字図書館

住所・連絡先
〒169-8586 東京都新宿区高田馬場 1-23-4
電話 03-3209-0241(代表)

インターネット
日点 検索

2015.03.Ver.1